ライバルのひ・み・つ？

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ライバルのひ・み・つ？

【Ｎコード】
Ｎ６１３０Ｘ

【作者名】
ｕｓａ

【あらすじ】
東の名探偵工藤新一に、ライバル出現！
現場に来て数分で事件解決まで導く彼女に、新一は圧倒されつつも認めていく。
やがて彼女は、新一の恋人蘭にも近づきはじめたが…。
“本当に彼に相応しいのはあなたじゃなくて、私なんじゃない？”

彼女の正体は、一体何なのか！？

0：謎の少女

工藤新一は困り果てていた。

彼はこの三日間、この大きな屋敷で起きた殺人事件の調査をしていた。

もう犯人の目星も付き、推理も完璧。

そんな彼がなぜ、困っているのかというと…。

「証拠がねえ…」

さすがの名探偵でも、証拠も無しに犯人を逮捕することはまず不可能であろう。

そうとは知らない目暮警部は、新一に犯人は誰かとたずねている。

「え？あ、あぁ…そうですね。もうちょっと待っててください」

新一が慌てて答えると、少し残念そうな顔をしながらも、再び捜査に戻る。

「でも君にしては珍しいじゃないか。いつもならこんな事件はちょろいものだろう」

「そんなことはありませんよ。事件に得意も不得意もありませんからね」

2人が黙々と現場を見ていると、突然ドアが開いた。

「け、警部！」

そこには慌てた様子の高木刑事。

「た、大変です！」

「なんだね？」

尋常じゃない慌てぶりに、目暮も目を丸くさせている。

「そ、それが…」

「高木刑事、落ち着いてくださいよ」

「落ち着いてなんかいられないよ！」

だが、高木は一瞬だけ息をつくと、言った。

「い、今、容疑者がリビングに集まっています」

「？それがどうかしたのか？」

いまいちピンとこない様子の目暮に、高木は早口でまくしたてる。

「探偵と名乗る子供が、容疑者を全員集めて推理をはじめようとしてるんですよ！」

「な…何ィ！？」

新一も唖然とする。

探偵？子供？一体誰が？

「一体そいつは誰だ！？」
「わ、わかりません。ただ～その～…逆らいがたい雰囲気でして、言われるままに警部達を呼びに来まして…」
「馬鹿もんっっ！！素人に言われてのこのこ従う刑事がどこにおるか！！」
怒鳴られっぱなしの高木は、しゅんと首を垂れる。
「すいません…」
「ま、まあまあ。とりあえず、リビングに行ってみましょう」
新一がなだめると、ようやく目暮も動き出す。
「それで、その探偵気取りの子供とやらは？」
「はぁ…もう慣れたような感じでバリバリに捜査やってます…」
「全く。二年前の君を思い出すよ、工藤君」
ちろっと横目で見られ、新一は苦笑する。
リビングの扉の前に立つと、中から誰かの声が聞こえてくる。
「そう…。犯人は今もこの中にいるんですよ。警察や名探偵をも欺くほどの狡賢い頭脳をもった、殺人犯が」
その声を聞くと、目暮ははて、と言った。
「どっかで聞いたような声だな」
「あ、警部も思いましたか？」
新一ももう一度耳を澄ませる。

やはり聞き覚えのある声だ。
だがどこで聞いたかは全くわからない。
「とりあえず、開けますよ」
と、高木がドアに手を伸ばす。
そして、その扉が開いた瞬間、三人の目に一人の子どもの姿が見えた。
いや、正確には高校生ぐらい、そう、新一と同い年ぐらいの少女だった。
黒のハイネックシャツにデニムのミニスカート。
薄い茶髪のショートカットで縁取られた小顔に、少しつりあがった勝ちきそうな瞳。
まるでモデルのようなプロポーション。
彼女は芸能人と言ってもおかしくないほどの美少女だった。
「警部を連れてきましたが…」
「ああ、お疲れ様。どうぞ、お掛けになって」
何となく上から目線な言い方だが、目暮と新一は近くの椅子に腰を下ろす。
「さぁ、推理の続きをお聞かせしましょう。犯人はこのお屋敷の大

旦那様が殺害された時、ずっと大旦那様の部屋にいたんです。彼らが来た時も、ずっとね…」

チラリと新一たちを見て、ふっと笑みを浮かべる。

「だが、そのような人物がいたらすぐに…」

「ええ、もちろん、わかってますよ」

彼女は口を挟む目暮を無理矢理黙らせ、続けた。

「ですが、大旦那様のお部屋には、大きなクローゼットがありました。あの中には大量のお洋服が入っていたはずです。その中に隠れていれば、万が一クローゼットをあけられても、ばれる心配はほぼないでしょう」

「で、でも！それならだれだってできるじゃない！」

容疑者の一人が叫ぶ。

「そんなことはありませんよ。これは犯人にしかできない犯行なんですから」

取り乱す容疑者に怯える様子もなく、彼女は言った。

「私は先程、クローゼットと言いましたが、正確にはその下…。つまり、クローゼットの引き出しに、犯人は隠れていたんです。そして、その中に入れるほど小柄な体を持つ人は…」

言葉を止め、彼女はゆっくりと一人の人物を指差した。

「あなたですね、娘さん」

新一は絶句した。

まさしくここまでは自分が考えていた推理とぴたりと同一だった。

だが肝心の証拠は？

「わ、私が父を殺したとおっしゃるの？その証拠は？」

「あらあら。まだお気づきになってませんか」

彼女はせせら笑いながら、ポケットからあるものを取り出す。

「あなたの車の中に入っていました」

血まみれになったハンカチを差し出した。

すると、一瞬でその容疑者の顔色が変わる。

「私の車は、今は…」

「盗難届なんて真っ赤な嘘。正確には、あなた自身がこの近くの森の中に放置していたんでしょう。そしてその中に、自らの犯行の証拠を隠していた」

彼女は振り返ると、目暮に向かってハンカチを見せた。

「どうでしょう？これから彼女の指紋が検出されれば、立派な証拠かと思いますけど？」

だが目暮はポカンと口をあけて、彼女を見た。

次に新一の方も見るが、彼も全く同じ表情。

「さ、早くこれを鑑識に。あ、ご心配なく、素手で触るなんてど素人のような真似はしてませんから」

いや、素人だろ。

自信満々に語る彼女に、二人はその言葉が言えない。

やがて本人の自供により、犯人は逮捕されたが、新一は未だに首をかしげていた。

彼女は誰なのか？

何故たった今来たばかりの彼女が、ずっと現場にいた自分よりも早く事件を解いたのか？

それをたずねようにも、周りにはもう、泣き崩れる屋敷の住人と警察しかいなかった。

0：謎の少女（後書き）

謎の少女の正体とは！？

次回もよろしくです♪

1：上坂凜

「ふぁ…」

翌朝、四日ぶりの登校途中、新一は眠たげに欠伸を繰り返していた。

「シャキッとしなさいよ！」

「へイへイ…」

蘭からの注意も右から左へと受け流し、さらにもうひとつ欠伸。

「それで、その女の子がどうかしたの？」

たった今、二人は昨日の少女について話していた。

「ああ…。気付いたらいなくなってたよ。何も言わずにすーっとな」

「ま、まさか、その子って…」

蘭が顔を青くさせる。

「ゆ…幽霊！？」

「なわけねーだろ」

予測はついていたものの、呆れ声を返す。

「だって、急に出てきて消えちゃったんでしょ？もしかしたら、ってこともあるじゃない」

「幽霊が何で推理なんかすんだよ」

「それは…きっと、生きていたころは探偵だったのよ！それで、死んでからも事件を解きたいって気持ちが…」

怖がりのくせに幽霊について喋り続け、蘭は真っ青になっている。

「そんなもんがこの科学の時代にいるかよ。ちゃんとした人間だったから、安心しな」

新一がそう言うと、蘭はまだ納得のいかない表情をしていたものの頷く。

「でも帰ってきてそうそう事件の話だなんて…。もっとほかにあるんじゃないの？」

「ん？何が？」

「だ、だから、その…」

先程とは打って変わって、蘭は少し頬を赤くさせている。

「た、例えばだけど…あ、飽く迄も例えば、なんだけど…」

蘭は口をもごもごとさせ、小声で言った。

「あ、会いたかった…とか」

横目でチラッと新一を見つめた。

だが、新一は顔色一つ変えない。

「し…新一？」

「あのなぁ…」

グイッと顔を近くによせる。
蘭の顔が一気に赤く染まる。
だが新一の目は至って冷静。
「…もう少しでかい声で言えよ。聞こえねえだろ」
「……」
一瞬、蘭が冷たい視線を新一に向けた。
そして、新一の頬を平手打ちを一発食らわせると、一人学校へと行った。
「いって！おい！」
頬を押さえながら新一が追いかけはじめる。
こんなんでも、至って普通の朝。
そう。
この日までは…。

「はよーっす」

教室のドアを開けると、冷やかしの声が飛んでくる。

「おーっ、工藤！久しぶりに来たくせに女房と一緒か！？」

「いいねえ、ラッブラブ～」

「バーロ！んなんじゃねーよ」

自席にバッグをおき、伸びをする。

「ねみ…」

「寝ないでよ」
隣に蘭も座ると、新一の額をぺちっと叩く。
「そーそー。工藤！お前が休んでる間、転校生が来たんだぜ」
「かなりの美人だぜ！ほっそりしてんのに出るとこでててさー」
「マジ？」
少しくいついた新一に、再び蘭が冷たい目を向けた。
そこでチャイムが鳴り、それぞれが席につきはじめた。
新一は噂の転校生は誰かと思ったが、生憎担任が入ってきてわからずじまい。
あとで蘭に聞こうと思い、持ってきた小説を読みはじめた。
「工藤～本しまえー。ホームルーム始めんぞ」
担任が出席を確認しはじめた所へ、ドアがガラガラと開き、四人の生徒が入ってきた。
「遅れました～」
先頭に立っている生徒が担任に向かってのんびりと告げる。
「また上坂達か。早く座れ。今日はなんだ？」
「道が混んでたんでー」
上坂と呼ばれたその生徒は反省した様子もなく、後ろの三人を引き

連れうしろの方へ行く。
その途中、新一の席の横を通ろうとした。
そこで、その生徒はピタッと足をとめた。
新一もそのことに気付き、見上げる。
「おはよう。名探偵殿」
「お…お前…」
薄い茶髪のショートカットに、細い体、勝ちきそうな目。
まさしく、昨日の少女と同一人物だった。
「はぁ～い」
少女は楽しげに手を振っているが、後ろにいる三人は顔をしかめている。
「凜様。お知り合いですか？」
「ええ、ちょっとね」
すると、その三人はいきなり新一の前に仁王立ちをする。
「いくら凜様のお知り合いと言えど、凜様に対しその態度は許しがたいものですね」
「今すぐ態度を改めなさい」
「は…ハァ？」

新一がポカンとしていると、上坂凜（かみさかりん）は片手を上げ三人を制した。
「天音、沙羅、久美、やめなさい」
三人はすぐに大人しくなったが、未だに新一を睨みつけている。
「ごめんなさいね。気にしないで」
凜はそう言ってから新一の顔をじろじろと眺めまわした。
「な…なんだよ？」
再び三人が新一を睨む。
「な、なんですか」
「ああ。ちょっと興味があっただけよ。東の名探偵にね」
新一は気になっていたことを口にする。
「昨日のあの推理は…」
「解決を先越されたって思ってるのなら、気にしないでちょうだい」
新一が不思議そうな顔をすると、凜は言った。
「だって同業者だし？よろしくね。同じ高校生探偵として」
凜は整った顔に、不敵な笑みを浮かべた。

2：探偵と人間

「そう。犯人はやはりこのドアから逃げたんですよ。目暮警部…」
「そ、それで犯人は一体！？」
「焦らずとも、警察が去ったと思いこんでいるその人は自ら現れてくれますよ。自分が残した、トリックの証拠を隠滅するために…」

ここまではいつも通りの予定。

そう。

この後しばらく待った結果、その犯人とやらが出てきて、見事逮捕に至るはずだった。

それが新一や目暮の思い描いていた逮捕劇だったのだが・・・。

事実は大きく違っていた。

時間は刻々と過ぎていく。

さすがに遅いと、時計を確認。

一五分は経過している。

いくらなんでも、長すぎる。

「工藤君。本当に犯人は来るのかね？」

痺れを切らした目暮はたずねる。
だが最もイラついているのは当の新一の方。
「え、ええ。そのはずなんですけど…」
その時、ガチャリと例のドアが開いた。
2人は慌てて息をひそめ、物陰から様子を窺う。
すると…。
「出てきていいですよー。もう犯人なら捕まっちゃいましたから～」
「…は？」
凜はひょこっと顔を覗かせ、隠れている新一たちを見て笑った。
「やっぱりここにいたわ。目暮警部、あなたの帽子がチラチラと見えていたわよ？」
目暮は慌てて帽子を押さえる。
「だ、だが何故わしの名前を…」
「警部！今、犯人をパトカーに乗せ、連行しようと…」
高木刑事がやってきて、外の方を指差す。
「また君が指示したのかね？」
目暮にジト目で見られても、凜は涼しい顔。

「あら。あなただって私の名前を聞けば従わずにはいられないんじゃない？」
「ハァ？」
「上坂凜、と言います。どうぞよろしく」
しばらく目暮は、口の中で上坂、上坂…と呟いていたが、やがて顔色を変えた。
「ま、まさか、次期警視総監と噂の…！？」
「上坂忠義の娘。正解！」
凜はニコッと笑う。
「し、失礼いたしました！」
目暮と高木は揃って警礼。
「ま、知らなかったのならしょうがないでしょ。パパには言わないでおいてあげるわ」
上から目線なもの言いにも、二人は何も言えず。
「次期警視総監の娘ねぇ…。事件の情報を多く知っていても不思議はねえな。通りで…」
「良かったじゃない。結果、私よりもあなたが劣っているってことにはならなかったんだから」
新一はきょろきょろとあたりを見回す。

「アイツらはいねえのか？」
「アイツら？」
「学校でお前が連れて歩いてる三人組だよ」
「あぁ…あの子たちね」
凜は軽く頷いた。
「今はいないわ。現場には来ないよう言ってるから」
それを聞き、新一はホッとしたような顔をした。
「ごめんなさいね。普段は大人しくていい子たちなんだけど、カッとなると手のつけようがなくて」
新一は苦笑を返す。
「工藤君、それと、凜さん。わしらは署に戻るとするが、君らは…」
「僕もすぐ帰りますよ。今日は蘭と約束してるんで」
「デートかい？」
高木がたずねると、新一は照れ臭そうに頬を掻いた。
「まぁ、そんな所です」
「それじゃ、私も帰るとするわ」
凜はそう言って外に目を向けた。
そして、目を大きく見開いた。
「どうした？」

「犯人がいないわ！」

三人も驚いてパトカーを見る。

ドアが開けられ、警官が二人倒れている。

「逃げられたのか！？」

「いえ、きっとこの中に…」

おそらく犯人の狙いは…。

そう思って振り返った時、新一は冷や汗をかいた。

そりゃ、刃物を持った犯人がもの凄い目で睨みつけていたら、誰だってそうなると思うが。

「上坂！隠れてろ！」

新一はいきなり凛を後ろへ追いやる。

「ちょ、ちょっと！」

凛は声を上げたが、それも犯人の叫びにかき消される。

「うあぁぁぁぁぁッッ！」

犯人が、凛に向かって突進してきた。

「きゃあぁぁぁッ！」

凜の悲鳴に戸惑うことなく、新一は目の前に遭った花瓶を蹴り…
犯人の顔面に、ゴール！！
「よッしゃぁ」
慌てて高木が犯人を再び取り押さえる。
目暮は外にいた警官二人を説教していた。
「大丈夫か？」
「あ…え、ええ」
新一が差し出した手を、凜はそっと握って立ち上がる。
「あ、ありがとう。とりあえず礼を言っておくわ」
「無理すんなよ。体が震えてるぜ？」
冗談半分で言ったつもりだった。
だが、凜はもともとつり上がっていた瞳を更につり上げた。
「うるさい！あなたに何がわかるの！？私を馬鹿にする気！？」
凜は初めて冷静な女王の仮面を脱いだ。
そして、怯える普通の女の子の素顔を見せた。
「私は探偵なの。これぐらい平気よ…」
「…お前、探偵やめた方がいいと思うぜ？」

肩をカタカタと震わせながら呟く凜に、新一は言った。

「な、なんですって？」

「探偵である前に人間だってことを忘れたやつに、真実なんか見えっかよ」

新一はなおも俯いている凜に冷たく言うと、その場を一人離れた。

2：探偵と人間（後書き）

予約投稿♪

今頃私は、必死になってテスト勉強をしている頃でしょう（笑）

3：紅茶とワッフル

「ただいま」
「おかえりなさい、凛様。事件だったんですか？」
「ええ。まあね」

玄関をくぐると、帝丹高校の制服を着た例の三人組のうち、一人が出てきた。

頭を下げながら、さりげなく凛のカバンを持った。

「前に凛様が気に入っていらしたワッフルと紅茶を買いましたので、それをお届けに」
「ありがとう、沙羅」

沙羅は嬉しそうに微笑むと、凛の前に立ち歩きだす。

「天音と久美は？」
「天音なら紅茶を淹れています」
「へぇ、天音の淹れた紅茶ね…。飲めるのかしら？」
「どうでしょう。久美は先程から見当たらなくて…」

すると、別の部屋から声が聞こえてきた。

「きゃあ～～～ッッ助けてえぇっ！」
「…いたようね」
「ちょっと行ってまいります」

悲鳴がした方へ行くと、大きな犬が一人の少女を追いかけ回していた。

「まぁ…」

沙羅が呆れ返ったかのようにため息をつく。

「全く…。マックス、ストップ！」

マックスは凛の命令に従い、ピタッと止まった。

「久美もストップ」

「はぁ…た、助かった…」

久美は息を切らしながら座りこんだ。

「マックス！あれほど勢いよく人を追いかけちゃダメって言ってるのに」

凛はマックスを叱るように言ったが、マックスは舌を出しながら凛の顔をなめた。

「コラ！」

「紅茶が入ります！うわっ」

ドタドタと足音がして、もう一人誰かがやってきた。

そして、危うくマックスに躓きそうになる。

「ワン！」

「ご、ごめん、マックス…」
「天音、ここは凜様の御宅なんだから、あまり派手に走り回らないように」
天音は面白くなさそうに口を尖らせた。
「あたしの心配はなしかよ」
「やめなさい。とりあえず、私の部屋に行きましょ。話はそれから」
凜が宥めると、二人は頷いた。
「それで、天音。紅茶の入れ方はわかったの？」
「はぁ、一応…。執事さんの見様見真似でしたが」
「ご心配いりません、凜様。酷いようなら私がやり直しますので」
天音の不安げな返事に、沙羅は淡々と言った。
「おい沙羅。失礼だろ」
「あら意外。天音でも失礼という言葉を知っていたのね」
「んだと！？」
「あ～！沙羅ちゃんだけずるい！久美も紅茶淹れてみたい～」
「おやめ！」
凜の一声で、三人はぷっつりと黙る。
「少し落ち着きなさい」
「す、すみません…」
代表して沙羅が謝る。

「今朝の工藤君の件を気にしてるんだと思うけど、それならまず、彼に謝るべきでしょう」
「あ、あの、凛様。そのぅ、工藤新一に大層ご執着のようですが…」
天音がおずおずと言った。
「悪い？」
「いえ！ただ、その…」
「凛様って、もしかして工藤新一が好きなのかな、って話してたんです」
「久美！」
うっかりしゃべった久美の口を、天音が慌ててふさぐ。
「ち、違うんです！そんなことを言ったわけではなくて…」
「別にいいわよ」
部屋に着くと、凛はソファに座り、足を組んだ。
「ただし、本当にそうだとしても、あなた達には関係ないわ」
「は、はい」
「では凛様。まさか…」
沙羅が驚いたような表情をすると、凛は笑った。
「違うわよ、沙羅。私は探偵として彼に興味があるだけ。ま、ちょっと今日は色々あったけど」
凛は天音の淹れた、色がやけに濃い紅茶を手に取った。

ゆらゆらと揺れる水面上に、自分の顔が映っている。
「探偵である前に、人間…ね」
「どうかなさいましたか、凜様」
ぽそっとつぶやく凜に、天音がたずねた。
「何でもないわ」
と、凜は答えたが、やはりまた沙羅が言った。
「天音の紅茶なぞ飲めたものではないでしょう。私が淹れ直した方が…」
「そんなこと凜様は言ってないだろ！」
「味のわからないあなたと久美にはそうでしょうけど」
「えっ？久美も？」
あっという間に、再び沙羅と天音の言い争いが始まる。
それを目を細めながら、凜は眺めていた。
こんな事をしているが、二人は決して不仲ではない。
むしろ、気の許せる親友と言っていいかもしれない。
こうして四人でいる時間が一番落ち着く。
凜は紅茶を一口飲んだ。
沙羅の言う通り、飲めたものではない。

だが、自然と顔に笑みが広がっていく。

「凜様、良いことでもあったんですか？」

久美が目を丸くさせた。

「今日はいつもよりも笑ってますね」

「久美！」

沙羅がたしなめたが、凜はそれを制した。

「そうね…。あったかもしれないわね」

そう言うと、凜はワッフルに手を伸ばした。

ふわっと口の中に甘さが広がった。

4：ジェラシー

「そしたらね、園子ったら…」

翌朝、仲良く歩く一組のカップル。

もちろん、新一と蘭。

楽しげに話す蘭とは反対に、新一はボーっとしている。

「…新一？」

おかしいと思って蘭が声をかけると、新一は我に返った。

「な、なんだったっけ？」

「昨日園子と行ったケーキ屋の話…。どうしたの？」

「あ…いや…」

新一は歯切れ悪く返事すると、再び前を向いた。

…おかしい。

おかしすぎる。

蘭は一人で先を行く新一の後ろ姿を見ながら考えていた。

何かあったのだろうか。

昨日、目暮に呼ばれて事件に行ってからというものずっとあの調子だ。

何を言っても上の空。

ためしに夕飯のお鍋にタバスコを入れてみたが、気付かずに平らげていた。

とりあえず、しばらくは何も聞かずに様子を見よう。

蘭はそう思って、新一の隣に並ぼうとした。

しかし、その前に誰かに肩を掴まれ、グイッと後ろにやられた。

「工藤君」

名前を呼ばれて新一が振り返る。

「か…上坂…」

「昨日はどうも」

凛は笑って新一に会釈をしている。

蘭も行こうとしたが、何故か天音と沙羅と久美にガッチリと抑えられている。

「あ、あの…」

「今は動かないで」

「ジッとしていた方が身のためですよ」

「そーそー。そんなことしたら凛様が…」

「「お黙り！」」

漫才のようなやり取りを聞きながらも、蘭は新一と凜の方を向いた。

そこだけ別世界のように華やいでいる。

美男美女とはまさしく二人のこと。

だが、生憎その二人の様子、特に新一は沈んでいた。

「わ、悪かったな、昨日は。言い過ぎた…よな」

「気にしてない。あなたの言う通りだと思うわ」

自分にはわからない会話。

一体何のことを話しているの？」

「でも私、探偵はやめないわよ。いつかあなたぐらいのレベルになってみせるわ」

「そ、そうか」

「助けてくれて、ありがとう。感謝してるわ」

凜はそう言って、極上の笑顔を浮かべた。

「凜様…」

「お美しいです…」

「ホント…」

蘭の後ろの三人が恍惚とした面持ちで言った。

それを見ながら、内心気に入らない自分がいる。
新一は自分の恋人なのに、彼女のような美人と一緒にいる。
ただの嫉妬だけど、悔しくてたまらない。
きっと自分が隣にいても、あんな風に輝いてみえないだろう。
「それじゃ、私は先に行くわ。彼女にも申し訳ないし」
凜は最後に蘭をチラッと見て微笑んだ。
周りから見れば綺麗な笑みだったのだろうが、蘭にはただ自分が馬鹿にされたような気がしてならない。
「いらっしゃい」
凜が手招きすると、三人は蘭の腕を放して凜のもとへ向かう。
「それじゃ…あ、いけない！」
一瞬凜は背中を向けたが、すぐに振り返った。
そして…新一に向かって笑顔をつくると、その頬をキスをした。
突然のことに新一は固まった。
蘭も動けなかった。
「失礼」

凜は手を振って去っていった。
新一は未だ頬をおさえている。
何が起きたのかわからない、と言った感じだ。
その様子を見て、蘭は手にグッと力が入った。
「新一…」
口を開くと、低い声が出た。
「ら、蘭…」
「楽しそうね…」
いや、楽しそうではない。
決して。
だが、今の蘭にはそうとしか見えない。
止めようにも止められない。
気付いたら、新一の頬を叩いていて、自分は泣いていた。
周りが何事かとこちらを見たが、気にしちゃいられない。
「新一の馬鹿っっ！」

最後にそう怒鳴ってから、蘭は走り出した。

5：相応しい？

何であんなことをしてしまうのだろうか…。

一人きりの帰り道、蘭はため息をついていた。

あのあと結局、新一とは一言も話していない。

別に殴るつもりなんてなかったのだが…。

気まずくなり、園子伝いに先に帰ると言って、現在に至る。

「ハァ…」

これで何度めだろう。

数えるのもアホらしい。

「ちょっと！」

後ろの方から声が聞こえてきた。

しかし、蘭は自分とは思わずに前を向いていた。

「聞いてるの？あなたよ、あ・な・た！」

「…へ？」

凜は少し目を怒らせていた。

「勘弁して。私は人に無視されることに慣れていないの」
「そ、そう…」
返事をしながらも、自分の顔が引きつるのを感じた。
いけないとわかっていても、自然と声も尖る。
「ふうん…」
それを気付いているのかいないのか、凜はじろじろと蘭を眺めまわす。
「な、なんですか？」
蘭は後ずさりをする。
あの腰ぎんちゃく三人が見ていたら、間違いなく怒鳴りだすだろうが、幸い連れていなかった。
「あなた、噂通りの美人ね」
「…はい？」
「ああ、ごめんなさいね。ただ前に天音たちから聞いたのよ。工藤君があなたと付き合っているのは、あなたの容姿が目当て、って」
それを聞くと、蘭は絶句する。
「な…っ！だ、誰ですか、そんなこと言ったの！？」
もちろんわかっている。

蘭を妬む新一のファン。

「あらいいじゃない。それだけあなたが美人だってことでしょ？あなただって工藤君の名声が目当てじゃない」

「ふ、ふざけないでください！何で私が新一の名声なんか…」

顔を真っ赤にさせる蘭を凜は片手で制した。

「ここで立ち話っていうのもあれだし、どこかカフェにでも入りましょう」

怒りでほぼ頭が真っ白になっていた蘭は、考えるより早く頷いた。

「…で、なんですか？」
「慌てないでよ」

オレンジジュースをストローでゆっくりと吸いながら、凛はカラカラと氷の音をたてる。

「一体何なんです？上坂さん、今朝のことだって…」
「ああ、あれ？」

凛はストローから口を放した。

「あんなの挨拶みたいなもんでしょ？気にしないで」
「き、気にします！」

蘭がバンとテーブルを叩くと、一口も飲んでいないカフェオレが揺れた。

「ま、落ち着きなさいよ。今すぐ別れろとかいうわけじゃないし」
凜は笑って再びジュースを飲む。
「当たり前です」
「でも今喧嘩中なんでしょ？」
「誰の所為ですか！」
カッとなって怒鳴る蘭を、凜は面白そうに見ている。
まるで他人事。
「今まで工藤君は、あなたを現場に連れて行ったことはある？」
「え？」
「私が聞きたいのはそれだけよ」
全く意味がわからないが、蘭は答えた。
「あんまり…ないです」
大抵の場合、事件の方が寄ってくるのだから。
「じゃあそういうことでしょ」
「ど、どういう意味ですか？」
「わからない？」
凜は唇の両端を少し上げた。
「彼はあなたを信用していないのよ。足手纏いになると思っている

から、現場には連れて行かない」
「し、新一はただ、私を危ない目に遭わせたくなくて…」
「考えてみなさいよ」
蘭を遮って凛が言う。
「私なら事件の情報をいち早く彼に教えて、一緒に推理もできるし、何より自分の身を守れるわ」
「わ、私だって自分の身ぐらい守れます！それに私の父も探偵だし、最低限の情報ぐらい…」
探偵と聞いて、凛の目の色が少し変わる。
「へぇ。あなたのお父さん、探偵なの？」
「毛利小五郎です」
「…“眠りの小五郎”？」
凛は繰り返すと、爆笑した。
「何がおかしいんですか！」
「あの人は自分で推理なんかしてないじゃない！人から教えてもらったことを眠ったようなポーズをとりながら、さも自分が導き出したもののように言ってるだけ！何であんな人が名探偵って呼ばれているのか、不思議でしょうがなかったわ」
この時蘭は、自分の父親が馬鹿にされたことよりも先に、こんな事を考えていた。
小五郎がただのへっぽこ探偵であることを見抜いた…！

「もう一度言うわよ。本当に彼に相応しいのはあなたじゃなくて…私、なんじゃない？」

うっとりするほどの綺麗な笑みを浮かべながら凛は言った。

残念ながら、今の蘭はただゾッとするばかり。

「それにあなた、今自分の身は守れるって言った？」

「こ、これでも空手部ですから…」

「なめないでくれる？」

先程とは打って変わって、凛は冷たい声を出す。

「私は命をかけてるの。生半可なこと言わないで。私はそういう人が一番嫌いなの」

そう言うと、凛はブランド物の財布の中から一万円を取り出す。

「ここは奢るわ。お釣りもとっといていいわよ。あなたのお父さん、今は依頼人一人もいないでしょうし」

「ま、待って！」

最後に蘭はたずねた。

「新一のこと…好きなんですか？」

「…そうかもね」

凛は不敵な笑みと、大きな不安を蘭に残して去っていった。

6：寂しさ

新一と顔を合わせないようにと早めの登校。

人気のない下駄箱で、蘭は一人寂しさを感じる。

新一との喧嘩に続き、凛のあの言葉…。

“本当に彼に相応しいのはあなたじゃなくて…私、なんじゃない？”

その通りかもしれない。

凛のように美人で、頭が切れて、探偵としての才能もあるような人の方が、新一に相応しいのだろう。

でもそれを認めたくない…。

新一の彼女は自分だと、堂々と言いたい。

なのに、凛の高圧的な態度がそうさせてくれない…。

思わず暗い気分になっていて、目の前に誰かがいることに気づくのが遅れた。

「あ…ごめんなさい」

ぶつかりそうになって謝るが、その誰かは蘭を通そうとしてくれなかった。

「あの…」
「ちょっとアンタ！一体どういうつもり！？」
一人が蘭をドンと突き飛ばした。
「いた…」
「あなたが凜様と張り合おうなんて、百年…いいえ、百億年早いわ！」
もう一人後ろから出てきてヒステリックに怒鳴る。
「はぁ？」
あまりのことに言葉が出せないでいると、天音が蘭に詰め寄る。
「例え工藤新一のような彼氏がいても、アンタみたいな普通の人間が、凜様に勝てると思ってんの？」
「そうです！彼のような方には、やはり凜様のような完璧なお方が…」
「ま、待ってよ。何のこと？私上坂さんと張り合う気なんてないし、大体なんで…」
「しらばっくれんな！」
天音は再び蘭を押した。
「凜様は工藤新一を気に入っておられるようだし、あたしらとしてはなんとしてでも二人にお幸せになっていただかないと困るの！」
「工藤君も、凜様のような素晴らしいお方が相手なら、文句なんてないでしょう」

早口にまくしたてる天音と沙羅に、蘭は圧倒されつつも言い返す。
「し、新一が上坂さんを選ぶなんて言ってないじゃない！」
すると、天音と沙羅は真っ赤になって怒鳴りだす。
「あ、アンタ凜様を侮辱する気！？」
「なんて思い上がりな！」
「今すぐ土下座して謝んなさい！」
「あの方を選ばない人間なんていやしないわ！」
二人の勢いに蘭がたじろいでいると、後方から鋭い声が飛んできた。
「あなた達！何をやってるの！」
凜は天音と沙羅を蘭から放すと、二人の後ろに隠れていた、いや、隠されていた久美を引っ張りだし、口に貼られたガムテープをとった。
「り、凜様。おはようございます…」
「今日もお美しいですわ…」
二人は急に縮こまると、小さい声で言った。
そんな二人を凜は睨む。
「沙羅！私はこんな事をしろとは一言も言ってないわ！あなたがついていながら、なんでこんな事を…。それに、久美は何でテープなんか…」

「そうでもしておかないと、余計なことを口に出すものですから…」
「そう…。それは一理あるわね」
凜は蘭に向き直る。
「ごめんなさいね。許してあげて。悪い子たちじゃないのよ」
「い、いえ…」
「あなた達は今すぐ去りなさい」
凜が強い口調で言うと、三人は慌てて走り出した。
「あの三人だけは私も信用してるから、つい彼のことを話しちゃったのよ…。まさかこんな事をするなんて、思いもしなかったし…」
少し申し訳なさそうな凜の表情に、蘭は首を横に振る。
「もういいです。それだけ慕われてるってことじゃないですか」
凜は小さく笑みを浮かべる。
「そうね…。前の学校からついてきてくれたの、彼女たちだけだったし…」
蘭は三人の姿を思い浮かべる。
行いは荒いが、心から凜を尊敬していたのはわかる。
「もう二度とあんなことはしないように、きつく言っておくわ」
「あ、あんまり怒んなくても…」
「私、ああいう卑怯なことは嫌いなの。…それと、昨日のことも謝

っておくわ。ついカッとなっちゃってね」
「わ、私もあんな大きなこと言っちゃって…。犯人が凶器を持って向かってきたら、誰だって怖いですしね」
凜の瞳が悲しげに揺らぐ。
「わかってくれればいいの。それじゃ…」
くるりと背を向け歩き出す凜。
その背中が何故か、蘭にはひどく寂しげに見えた。

7：誓い

「ちっ。あの女、許しゃしないわよ！」
「あ、天音ちゃん、やめようよ…」
「そうよ。この事がもしも凜様のお耳にチラとでも入れば…」
怯えるような声を出す久美と沙羅に、天音は怒鳴った。
「うるさい！あんたら裏切る気？」
「裏切るとかそういうことじゃないでしょ。先程凜様に叱られたのを、もう忘れたの？」
沙羅は天音の怒声は慣れているらしく、少し顔をしかめただけで言い返す。
「何さ、良い子ぶっちゃって。沙羅はただ、自分の株が下がるのが嫌なだけだろ？」
「なんですって？」
「お、落ち着いてよ。二人とも…」
「「お黙り！」」
二人の気迫に、怖がりの久美はビクッと身を縮める。
「沙羅、久美。あたしらの目的は何？」
天音がイライラと問いただすと、沙羅は答えた。
「いかなる時も、凜様の影となり、サポートすること」

久美もおずおずと言った。

「いかなる時も、凜様の味方となって、お助けすること…」

「それなら、凜様の邪魔をしているあの毛利蘭って女を、野放しにすることなんかできないよね？」

天音の瞳がぎらっと光る。

久美は震えたが、沙羅は平静を装った。

「それで？天音、あなたはどうする気？」

「決まってんじゃん。あの女を何としてでも工藤新一から引っぺがして、工藤新一を凜様のもとにお届けすんのよ」

「どうやって？」

「そ、それは…」

沙羅の目が段々冷ややかになっていく。

「計画もないくせによく偉そうな口を叩いたわね」

「な、なんだよ！どうせあんたらには何もないんだろ？」

「あったとしても言わないわ。これ以上凜様にご迷惑をおかけするわけにはいかないし…」

それを聞くと、天音は目の色を変えた。

「何かあんの？」

「さあね。今も言ったでしょ？あったとしても…」

沙羅がもう一度繰り返そうとした時、何かが沙羅の目の前を横切っ

た。

次の瞬間、何かが壊れる音がして、沙羅の後ろの壁が見事凹んでいた。

「天音ちゃん…」

久美が慌てて壁を押さえた。

だが、壁はすでにボロボロで、今は直せそうにない。

「天音。口より先に足が出るその性格、いい加減直したら？修理代は全部凜様のお父様がお支払いしてくれているそうね。あなたは凜様のお父様を破産させる気なのかしら」

天音の蹴りによって壁が傷ついたことなど、まるで気にしない様子で沙羅は言った。

「いいから答えろ！計画があるの？ないの？」

「…あったとして、あなたには実行させないわ」

「リーダーはこのあたしだよ」

鼻息も荒く天音は言った。

「でも今まで指揮をとっていたのは私…。もしもこの計画を本当にやるのだとしたら、天音にはやらせない。もちろん久美にも」

「く、久美も？」

久美は残念そうな、だがやや安心したような表情を浮かべる。

「やるのであれば、私一人でやるわ」
「沙羅。アンタはいつもそうだよ」
天音は腕を組み、沙羅を睨んだ。
「いつも一人で背負い込もうとする。あたしら、仲間じゃないの？」
「そ、そうだよ！」
沙羅は息を吐いた。
「これは人として許されるべきことではないし、もし見つかったら、私達だけではなく、凜様の御身も危ないわ」
「だから？諦めろって？ふざけんなよ」
「そうじゃないわ！ただ…やっぱり、凜様のことを思うと、やめた方が…」
頭を押さえ、沙羅は呻いた。
「沙羅。覚えてる？あたしらのもう一つの誓い」
沙羅は顔をあげた。
天音、沙羅、久美はそれぞれ視線を合わせる。
天音はゆっくりと言った。
「あたしらはいつでも、一心同体」
久美が続ける。

「何があっても、ずっと仲間」

沙羅も言った。

「隠し事、遠慮は一切なし。裸の心で向き合う…」

三人は頷きあうと、笑みを浮かべた。

8：インタビュー

新一は頭をガシガシと掻いた。

どうも推理がまとまらない。

原因は蘭。

蘭との喧嘩がまだ心の片隅に引っ掛かっている。

その所為か、全く集中できない。

とはいえ、事件を放棄するわけにもいかず、苛々しながらも現場をうろつく。

「どうだね、工藤君。犯人の目星とかは？」

「も、もう少しです…」

目暮の期待のこもった目に、新一は焦りを覚える。

今ならあの大阪の探偵の気持ちがよくわかる。

彼女のこととなると、どうにも推理に没頭できなくなるらしい。

こんな時、あの探偵がいてくれたら…。

いや、その想像はよそう。

本当に出てきそうだ。

「しかし、今日の君はいやに静かじゃないか。いつもなら容疑者にしつこいぐらいの質問を浴びせるのに」

「そ、そうですか？あはは…」

「それに、何だかその顔もつくりものみたいで気味悪いしぃ、無理しちゃってる感、見え見え」

「あはは…」

ん？

いや、待てよ。

今の目暮警部、何だか口調が違くなかったか？

それに声も高かったような…。

「これが本当にあの名探偵、工藤新一なのかー？そっくりの双子でもいるんじゃない？」

「か、上坂！？」

「おお、凛君」

「はぁ～い」

凛は楽しげに手を振ると、現場をぐるっと見回した。

どうやら大阪の探偵ではなく、もっと厄介なこちらの探偵が来てしまったようだ。

「で、名探偵殿。何にお悩みかしら？」

「別に何でもねえよ」

新一はぶっきらぼうに言うと、凛から離れた。

「ああ、目暮警部。悪いんだけど、ちょっと被害者の弟さんに話を聞いてきてくれない？来たばっかでほとんど何も把握してないもんだから」

「わかりました」

れっきとした捜査一課の警部は、凛に命令されるとすぐに部屋を出て行った。

「毛利さんとはまだ喧嘩中？」

「誰の所為だよ」

凛はフッと笑った。

「あなた達同じこと言うのね。そうね、私の所為。だから？」

「だからって、お前なぁ…」

「苦しい言い訳にしか聞こえないかもしれないけど、私アメリカ育ちだから、あんなの挨拶みたいなもんなのよ。確かにいきなり異性にキスなんて非常識だったわ。あの後毛利さんには謝ったわよ？」

それを聞くと、新一は少し顔をあげた。

「そんで？蘭は？」

「もちろん、許してくれたわ。さすがあなたの彼女ね。広い心の持ち主ですこと」

凛の言葉に、新一は息を吐いた。

「な、なら良かった…」
「さ、こんな事件さっさと解いて、早く彼女の所に行ってあげたら？」
「あ、あぁ…」
途端、新一の目に、いつもの輝きが戻ってきた。
それは、目暮たちの目を丸くさせるには十分だった。
数十分後、事件は解決。
後にマスコミが来て、新一と凛にインタビューを求めた。
明日の新聞にはきっと、二人のことが一面に載るだろう。
インタビューに適当に応じながら、新一は時計を見つめた。
早くしないと、蘭と話すのが遅くなってしまう。
「工藤君、この事件解決のポイントは？」
「上坂さん、工藤君と組むのは今回が初めてではないようですが、コンビネーションのほうはいかがですか？」
次々に飛んでくる質問の数々に、段々と答えられなくなってくる。
「同じ高校の制服を着ていらっしゃいますけど、二人は探偵以外にも関係がおありですか？」
「お互いのこと、どう思ってます？」
話の方向もずれてきて、新一はたじたじ。

ところが、凜はすました顔で答えている。

「私たちはただの探偵、それ以外に何があると言うんですか？私は彼を、立派な探偵として見ている、それだけです。まあ、彼の推理オタクぶりには少々ついていけない部分もありますが…」

「工藤君は？」

「え、えっと、僕は…」

「申し訳ないんですけど、彼はこの後予定が詰まってるんですよ。あとは私が答えます」

凜は新一の背中をドンと押した。

そして微笑を浮かべると、再び質問に答え始めた。

新一は心の中で礼を言うと、走り出した。

その様子を目の端でとらえながら、凜は目を細めた。

9：仲直り？

今日は厄日なのか？

蘭の家に行っても蘭の姿はなく、携帯にかけたり、行きそうな場所を当たってみたりしたが、なかなか見つからない。

園子にも聞いたが、何も連絡は来ていないという。

「アイツ…どこ行ったんだよ」

もう八時にも近く、あたりは真っ暗だ。

怖がりの蘭がこんな中を一人で歩いて帰れるとは思えない。

一通り探してみたが、やはり蘭は見つからず、諦めて家路に着く。

どうせ明日にはケロッとして帰っているだろう。

明日、朝一で謝ろう。

そう決めて、新一は家へと向かう。

周りの家から美味しそうな匂いが漂ってきた。

腹がグゥとなる。

そういえば、夕飯を食べていない。

蘭が口をきいてくれなくなってから、まともな食事をとっていない。

「あったけえもん、食いてえなぁ…」

呟いた瞬間、風が吹いてきて新一は震えた。

制服の上からは何も着ておらず、このままじゃ風邪をひいてもおかしくない。

早く帰ってカップラーメンでも食べようか。

そう思って、新一は走り出す。

「う〜っ、さみっ」

ようやく家も近くなってきたところで、新一は両腕をさする。

風が冷たく、何もしていない手はかじかんでいる。

息を吹きかけしのいでいると、玄関に辿り着く。

すると、何故だろう。

家の明かりがついている。

親が久しぶりに帰ってきたのだろうか。

ドアノブに手をかけ、ゆっくりと捻る。

あの両親なら、絶対に何か…

…仕掛けていない。

となると、強盗？

いや、まさか。

念のため、足音をたてないようにリビングに向かう。

するとそこには…

「あ…お、お帰り…」

「蘭…」

制服姿の蘭が、ラップをかけたシチューをテーブルに置いているところだった。

「お前、何して…」

「な、何でもない！じゃあね！」

そう言って蘭は、慌てて鞄を掴んで新一の脇を通り過ぎる。

「ちょっと待てって！」

ギリギリの所で新一は蘭の腕を掴んだ。

「もう怒ってねえんじゃなかったのかよ？」

「な、なんの話よ？」
蘭は本気で戸惑っている。
どうやら、来ていたのはたまたまらしい。
凜に担がれたのかと、新一は肩の力をガクッと抜いた。
「し、新一？」
蘭は驚いて新一に駆け寄る。
「ごめん。急に…」
「や…別に」
沈黙が訪れる。
どう話を切り出せばいいかわからない。
「あ、あのさ…」
「わ、私帰るね。お父さんに何も言わないで来ちゃったから…」
蘭は再び玄関口に向かおうとするが、新一は蘭の手を握ったままだった。
「放して」
「……」
「新一！」
「わりぃ。ちょっと聞いてくれよ」

新一は目を伏せたまま言った。

「この間のことは悪かった。でもオレはその…喜んでいたわけでもねえし、上坂もオレをそういう対象で見ているわけじゃねえから…」

新一は蘭の腕を話したが、今度は蘭もそのまま立ち止っていた。

「オレが好きなのは、蘭だけだし…例え、蘭が他の奴好きになったとしても、やっぱオレは蘭しか好きにならねえから…」

「…ふうん」

蘭も新一から目を逸らし、言った。

「許そうかと思ったけど、やめた」

「は？」

「私が心変わり？アンタみたいな推理オタクを一年も待っていた私が？アンタのことをこんな長く待っていられるのは私だけ。だから…新一のことを好きでいられるのも、私だけ」

蘭の頬が、ほんのりと赤く染まっている。

「蘭…」

「私は今怒ってるんだからね！」

ホッとして表情を緩ませた新一に、蘭は怒鳴る。

「怒らせた罰！…途中まで送っててってよね」

「へいへい」

渋々といった口調なのに顔は笑っている。

それがあまりにもアンバランスで、蘭は笑った。

「怒ってねえじゃん」

「怒ってます！」

「嘘つけ」

「本当よ！」

仲直りをしているんだかしていないんだか…。

結局二人は、笑い合って歩き出した。

１０：一寸先は闇

その数十分後、再び蘭の顔は仏頂面になる。

周りを行き来する数台のパトカー。

せわしなくあたりを駆けまわる数人の警察官…。

そう。ここは事件現場。

新一と久々に二人きりで歩いていると、どこかから悲鳴が聞こえ、それが通り魔の被害者であると気付いた新一は、即そちらへ…。

危ないからここにいろと言われ、またされてからすでに十五分。

こんな時間に外に制服でいたら、風邪をひいてしまうだろう。

手に息を吹きかけ、凌いでいると…

「キャッ！？」

突然肩を叩かれ、蘭は反射的に足を振りかざす。

「えっ？ちょ、ちょっとストップ！！」

そう言われてから、蘭はうしろにいたのが誰か悟った。

勢いをつけた足を、凜の顔面すれすれで急ブレーキ！

「ご、ごめんなさい！」
と、蘭は謝ったが、凛はすぐに冷静な表情に戻った。
「いえ、平気よ。背後からいきなり誰かが来たら、怪しむのが普通だわ。こんな所じゃね」
そう言って、チラッとパトカーのほうを見やる。
「あの、上坂さんがいるってことは、事件はまだ…」
「ああ、解決したわ。私と工藤君が手を組んだら当然でしょうけど」
気取って髪を掻き上げる凛を見て、蘭はホッとした。
これで新一も戻ってくる。
そうしたら、今度はちゃんと許してあげよう。
「それで、あなたは何故ここに？」
凛は蘭の顔を覗きこんだ。
「わ、私は、新一と一緒に歩いていたら、たまたまここに…」
「なあんだ。そうだったの」
つまらなそうに凛はため息をつく。
「てっきり私の言ったことを気にしているのかと思ったわ」
“彼はあなたを信用していないのよ。足手纏いになると思っているから、現場には連れて行かない”

つい先日言われた言葉を思い出し、蘭の表情が曇る。

「確かに、私は足手纏いかもしれませんけど…」

「けど？」

蘭はキッと凛を見据えた。

「でも、新一が私を信用しているかしないかなんて、わからないと思います。少なくとも、私は新一を信じてます」

すると、凛は微かに笑った。

「あらあら、素晴らしい恋愛ごっこね」

「ごっこって…」

小馬鹿にしたような凛の態度に、蘭は少し苛立ちを覚える。

「ま、良いんじゃない？ただ、気をつけることね。呑気にそんなことに現を抜かしていたら、いつかとんでもない目に遭うわよ？」

そう言って笑う凛。

蘭は背筋が凍るような気分がした。

「それより…あなたの携帯、鳴ってるわよ」

「あ、ホントだ…」

携帯を開くと、一件のメール。

『目暮警部と取り調べ行くことになった！わりぃけど、先帰っててくれよ』

顔が暗くなっていくのが自分でもわかる。

せっかく仲直り？したのに、結局一緒にいられないなんて…。

すると、もう一度携帯が鳴った。

『あぶねえから、佐藤刑事か高木刑事に送ってもらえよ！』

思わず顔がほころぶ。

そんなに心配なら、早く帰ってきてくれればいいじゃない。

自分がもう少し素直なら、そう言うだろう。

でも今は、このメールだけで十分胸がいっぱい。

携帯を抱き締め、難しい顔でメールを打つ新一を思い浮かべる。

「…馬鹿」

小さく呟いてから、『わかった』とだけ返信する。

「それじゃ、私も失礼するわ。取り調べに呼ばれてるの」

「あ、はい」

「気をつけてね」

もう一度言って、凛は目を細めた。

そして背を向けると、イヤリングを風に靡かせ去っていった。

しょうがない。

新一に言われた通り、佐藤刑事か高木刑事を見つけて車に乗せてもらおう。

キョロキョロとあたりを見回しはじめた時、再び肩をトンと叩かれた。

凜が戻ってきたのかと思い、今度は何も抵抗をしなかった。

しかし…

「んっ！？んぅ…！」

突然口に布を押し当てられた。

何かおかしい。

そう思った時にはもうすでに遅かった。

力が抜けていき、蘭は足元から崩れるように倒れた。

「いやー。今日も助かったよ、二人とも。しかも二件も立て続けに」
目暮は上機嫌で笑い声をあげる。
「いえ、どうってことないですよ。それじゃ、僕も失礼します」
そういうと、新一はその場を去ろうとした。
「工藤君。もう帰るの？」
凛は慌てている新一に声をかける。
「あぁ。蘭のヤツ、まだ怒ってっかもしんねえから」
「怒ってないわよ。…今度は本当よ。ついさっきまで彼女と一緒にいたの」
そう言ってから、凛はさりげなく新一の隣に並ぶ。
「途中まで送っていってくれない？今運転手が、ママのほうに付き合わされててね」
「オレは別にいいけど…」

とは言ったものの、新一は凜との距離をとっている。

「警戒しないで。もうあんなことはしないわよ」

「そ、そうか…」

悪戯っぽく言う凜に、新一も少し表情を緩ませる。

「でもお前、なんでいきなりあんなこと…」

「…知りたい？」

「は？」

凜は立ち止ると、新一を振り返る。

「教えてあげよっか？私の、ヒ・ミ・ツ」

妖しげに笑う凜。

その表情をどこかで見たことがあると思ったのは、新一の気のせいだったのだろうか。

11：危険な賭け

「いた…っ」

手首の鈍い痛みで、蘭は目をあけた。

いや、あけていると思った。

しかし目の前は真っ暗で、本当に目をあけているのかどうか、定かではない。

動こうと思ってから蘭は気付いた。

手が縛られている。

足も同様だった。

一体何が起きたというのだろう。

先程凜と別れた直後から、あまり記憶がない。

確か布を押し当てられて…

ああ、そうか。

気絶させられたのか。

ぼんやりとした頭の中、それだけわかった。

あの布には、何か薬でも含まれていたのだろう。
今も頭がボーっとして、うまく思考が働かない。
ここはどこ？
声に出して言おうとしたが、口からは息が出るばかりで声が出ない。
酷く体が重い。
後ろにあった何かに、そっと体を預ける。
疲労感からか、眠気が襲ってきた。
蘭は再び目を閉じた。
すると…
「お目覚めの時間ですよ」
冷たい声とともに、急に部屋が明るくなった。
あまりの眩しさに、ぎゅっと目をつぶる。
「縄をといてあげて」
「はーい」
そっと目を開くと、見覚えのある三人組の姿。

「ようこそ毛利さん。凜様親衛隊本部へ…」
天音はにんまりと笑った。
久美は蘭の縄をほどくと、天音の後ろに行った。
横には沙羅も構えている。
「な…ん、で？」
擦れ声を出す。
「言ったでしょ？あたしらはなんとしてでも凜様に幸せになっていただく。そのためにはなんだってするのさ」
「凜様のために、あなたには犠牲になってもらうわ」
いつになく人間性のない天音と沙羅の瞳に、蘭はゾクッとする。
唯一いつも通りの久美は、二人を交互に見つめている。
「犠牲って…？」
「まあ、ここであんたが工藤新一と別れるっていうのなら、話は別だけど？」
天音は蘭が座っていた椅子を軽く蹴った。
「ねえ、賭けをしようよ」
「賭け？」
「あたし、沙羅、久美。この三人にあんたが勝てたら、あたしらは工藤新一を諦めて警察にも出頭する」

「もし、私が負けたら？」

天音はまた笑った。

「もちろん、別れてもらうよ。工藤新一は、凜様のもの」

「この勝負を断るっていう手もあるけど、その場合あなたは一生、ここから出られないわ」

沙羅が冷静に告げた。

「やる？それとも、やらない？」

怖い。

これまでにも恐ろしい目に何度も遭ったが、この二人の瞳が何よりも怖かった。

でも、ここで逃げたら…。

「いいよ。やる」

それを聞くと、天音はニヤッとした。

「そうこなくっちゃ」

12：地獄

どれほどの時間がたったのだろう。

「ケホッ…」

蘭は咳き込んだ。

その間も、容赦ない攻撃が蘭を襲う。

痛みの所為で余計に体の動きが鈍い。

天音の提案した賭けは、至って簡単なものだった。

ただし、それは酷なものでもあった。

蘭が一人で、天音、沙羅、久美の三人を、武器も何も使わずに倒すことができたら、蘭の勝ち。

だが、蘭は薬の効果が切れていないせいで、思うように体が動かない。

その上向こうは、つい先程聞いたところによると、武道の達人らしい。

沙羅は剣道、久美が合気道、そして天音は、蘭と同じく空手。

簡単に言えば、蘭と平次と和葉を足して、更に二倍にしたような強

さだ。

いくら蘭でも、敵うわけがない。

それでも、蘭は怯むことはなかった。

いくら殴られようと、蹴られようと、投げ飛ばされようと、何度でも起き上がる。

それを、天音が一人、ニヤニヤと見つめていた。

「なかなか根性あるじゃん。でもいつまでもつかな」

どこか楽しげに言うと、蘭の後ろに回った。

目の前で竹刀を構える沙羅に気をとられていたためか、蘭はそのことに気づくのが遅れた。

振り返った時にはもう遅く、蘭は脇腹から蹴られた。

「うっ…！？」

「きゃはは！いいね、その顔！写メ撮って凛様に送ってやりたいよ」

蘭は答えず、そのままうずくまった。

だが、すぐに立ち上がると、気合を入れた。

「アアアァァァ…！」

一番手前にいた久美に向かって、得意の回し蹴りを飛ばす。

しかし、久美は一瞬ビクついただけで、いとも簡単に蘭のその足を掴み、投げ飛ばした。

思い切り腰を打ち、すぐに動けない。

「ナイス久美！」

「少しはお黙りなさい、天音」

沙羅は竹刀を揺らしながら、蘭に近付いた。

そして、それを蘭の顔の前に突き立てる。

「今すぐ許しを請うというのならいいでしょう。ですが、ノーといえば、今後も一切容赦はしません」

冷酷なもの言いにも、蘭は首を横に振る。

「では…遠慮なく」

沙羅は、座り込んだまま立ち上がれなくなった蘭の肩に、竹刀を振りおろした。

「あぁッ！？」

肩に激痛が走る。

でも避けられない。

体が、言うことを聞かない。

もう一度沙羅が竹刀を振りおろす。

すると、ガクッと力が抜けて、倒れ込んだ。

霞む視界。

薄れていく意識。

制服のあちこちが破れ、そこかしこが痛む。

まるで、地獄のような状況。

やがて、蘭の目の前は、先程と同じく暗くなっていった…。

13：救世主

もう駄目か…。

蘭が気を失いそうになったその時、誰かの声が聞こえてきた。

凛としていて、どこか上から目線の少女の声。

それから…

「蘭！」

愛しい人の声。

ふわっと抱きかかえられ、蘭はゆっくり目を開いた。

「喋れるか！？」

「し…新、一…？」

新一は安心したように笑う。

髪がぼさぼさで、服装も少し乱れていた。

ああ、必死で探してくれてたんだ。

「ど…して、ここに…？」

「おっちゃんから、蘭が帰って来ねえって電話が来てよ。高木刑事

も佐藤刑事も知らねえっつーから、探してた。上坂も手伝ってくれたんだぜ」

すると、凜が甲高い声で叫ぶのが聞こえてきた。

「あなた達ねぇ！こんな事しろって、私がいつ頼んだ！？沙羅！あなたには失望したわ。ここまで天音の暴走を止められないの？」

「り、凜様…」

三人は縮こまった。

そこには、先程までとは違って、冷酷なオーラがない。

逆に凜に怯えて震えている。

「それに久美！あなた、怖がりのくせに何こんな事に加担してるの！何故すぐに私に言わなかったの！そうすれば二人だってこんな事は…」

「い、いえ、凜様！この二人は悪くないんです！すべて私が計画し、二人は渋々手伝っただけです」

沙羅が進み出て頭を下げた。

「どうか、お叱りになるなら、私だけに…」

「あ、あたしのせいです！この二人を脅してこの人を襲わせたんです！怒るなら、あたしにして下さい！」

天音が沙羅の隣に並ぶ。

「く、久美も、二人を止めませんでした！久美にも責任あります！」

続いて久美も出てきた。

三人がそろって頭を下げても、凜の冷たい目は変わらない。

「私に謝る前に、まず彼女に何か言うべきじゃなくて？」

蘭に目を向ける。

辛うじて意識を保っている蘭は、虚ろな目で凜たちを見た。

「長い間一緒にいたけど、あなた達は私の性格がわからなかったようね。こういう、卑怯で、姑息で、きたないことは大っ嫌いっていうね！」

三人はすくみあがる。

「犯罪者となんか、もういられないわ。警察を呼びましょう。言っておくけど、私はあなた達を庇ったりしないわ」

そう言うと、凜はくるりと背を向けた。

「…お世話になりました、凜様」

やがて、パタパタと足音がして、沙羅、天音、久美の三人は姿を消していた。

凜は、がらんとした部屋を見渡す。

彼女らといた、一年間の幸せな思い出が浮かんでくる。

初めてあった時は、ただの生意気な女の子達。
そのうち段々とうちとけてきて、いつしかいつでも一緒にいるようになった。
事件の捜査を手伝ってもらったり、三人の大会を応援したり、一緒に紅茶を飲み、談笑したり…。
あの時間が、私にとって、どれだけ嬉しかったことだろう。
“凛様、私達、いつまでも凛様のお側にいます”
“本当かしら？”
“あたしらマジですよ！”
“フフッ。天音の言葉じゃ信用できないわね”
“久美だって、ずっと一緒ですよ！”
“ありがとう。三人とも、大好きよ…”
大雑把で不器用だけど、憎めない天音。
しっかり者で知的な沙羅。
怖がりで天然の久美。
自分にここまで尽くしてくれた彼女たちを、私は犯罪者にしてしま

った…。

「上坂さん…？」

蘭は静かに呼びかけた。

だが、凜は返事をしなかった。

地面に膝をつき、嗚咽を漏らす。

シンとしている部屋の中、凜の泣き叫ぶ声だけが響いていた。

ボーっとした頭の中、蘭は初めて、凜の人間らしい姿を見た気がした。

友人であり、仲間であり、良き理解者であった人々を失った凜。

蘭は意識を手放す寸前、彼女が三人の名前を呼びながら泣き崩れているのを見た。

１３：救世主（後書き）

救世主は新一君と凛さんでした。

正確には、その場所を教えた凛さんかもですが…。

次回もよろしくです♪

１４：過去

「ん…」

目が覚めると、白い天井がぼんやりと見えた。

手に温かさを感じ視線を向けると、新一が眠りながら、蘭の手を握っていた。

ずっとついていてくれたようだ。

スヤスヤと寝息をたてているが、服装は蘭を助けに来た時と全く同じだった。

そっと額に手を伸ばそうとした。

だが、その前に病室の扉が開いた。

「あら…起きた？」

「上坂さん…」

凜はまだ青い顔をしていたが、体を起こした蘭を見て、薄く笑う。

「具合の方はどう？」

「あ…はい。もう大丈夫です」

「そう。良かったわ」

凜は持っていた花瓶をベッドの側にあった棚に置き、傍らの椅子に

腰かけた。
気まずい沈黙の中、蘭は気になっていたことを口にした。
「あの…三人はどうなったんですか？」
すると、凛は眉をピクッと動かした。
「…さあね。自首したとは聞いてるわ」
冷めきった口調で言った。
「いいんですか？本当に…」
「何が？」
「大切な人達だったんでしょう？なのに、庇ったりはしない、なんて…」
「気にしないで」
自分のせい、とでも言うような蘭に、凛は言った。
「大切な子達だからこそ、庇うなんてこと、したくないの。ちゃんと罪を認めて、償ってほしいのよ」
そう言う凛の瞳に、うっすらと涙が浮かんでいた。
「そうですか…」
「昔からね、犯罪者を人一倍許せなかったのよ。父親の職業の影響かもしれないけど…もう一つ理由があってね」
遠い目をしながら、凛は語りはじめた。

幼いころ、父親が逮捕した連続殺人犯が脱獄し、誘拐されたこと。
その犯人は、未だにつかまってないこと。
以来、だれも信用できず、あの三人組だけが心の支えだけだったこと。
その犯人を捕まえるために、探偵になったこと。
だが今でも凶器が怖く、逃げ出してしまうそうになること。
「結局、私は探偵としても、人間としても、まだまだ未熟な井の中の蛙だわ…」
凜は静かに告げると、病室を出ようとした。
「ま、待って！」
蘭は叫んで呼び止める。
「ちょ、ちょっと聞きたいことがあるんですけど…」
「…何？」
蘭は新一を突いて、寝ていることを確かめた。
少し呻った気もしたが、起きる気配はない。
「あ、あの、上坂さんて、その…」
「用件は早く言ってちょうだいね」

口ごもる蘭に、凜はいらついた様子で言った。
「し、新一のこと…いつから好きなんですか？」
「…はぁ！？」
凜は彼女らしくもない大声を出した。
「何それ？」
「えっ？だ、だって、前に…」
しばらくしてから、凜はため息をついた。
「そう。あなたにはまだ言っていなかったわね…」
「な、何をですか？」
「私の秘密を…ね」
そう言って怪しく笑う凜が、どことなく誰かに似ている気がした。

15：ライバルの秘密

凜は頬杖をつき、話し出した。

「そう…あれは、小学三年生ぐらいの頃だったかしら。両親に連れられて、ある大きな洋館をたずねたの。そこに住んでいたのは、まだ若いご夫婦と、一人の生意気そうな男の子」

「それって…」

蘭が口を挟む余裕を与えず、凜は喋り続ける。

「しばらくの間、私の母と男の子のママが話していたのよ。何だか性格が似てて…そしたら、突然男の子のママが、母にとっておきのネックレスを見せてあげるっていいだしたの」

凜はクスッと笑った。

「そのネックレスを探しに行ったら、箱ごと消えててね…。男の子が、事件だ！って、嬉しそうに叫んでるの。私はもう、ただただ母にしがみつくばかりだったんだけどね、男の子がネックレスを夢中で捜索している間に、偶然見つけちゃったのよ。リビングにあった本の下に、隠れていたのをね」

そう言ってその時のことを思い出したのか、凜は新一を見た。

「彼、私が先に見つけたことがよっぽど悔しかったみたいでね、わたしと顔を合わせると、決まって面白くなさそうな顔をしてたわ」

「あの、その男の子って、やっぱり…」

蘭がたずねると、凜は頷いた。

「私が彼に初めてあったのは、その時よ。あの時の彼の子供っぽい顔、今でもはっきり覚えてるわ」

「じゃあまさか、新一を探してこっちに…とか？」

「いいえ。もっと具体的なわけがあったのよ」

そう言うと、凜は蘭に向って何かを差し出す。

それを見た蘭は、驚愕した。

「な、何ですか、この写真！？」

新一や蘭ばかりが映った写真。

事件現場や学校の中、喫茶店…。

仲よさげに映る二人、喧嘩中の二人。

「誰がこんな事…って」

「そうよ。私」

顔を真っ赤にさせる蘭に、凜はすまして答える。

「なんで…」

「そりゃ依頼されたからよ。ある人にね」

「誰ですか？ていうか、何を…」

凜はさっさと写真をしまった。

「そのうちわかるわよ。あなたもよーく知ってる人だから」
蘭は体勢を直して、凛に向き直った。
「それで…いつからなんですか？」
「ん？」
「いつから新一が好きなのか、って聞いてるんです！」
思わず怒鳴ると、凛は笑い出した。
「な、何がおかしいんです！？」
「ああ、ごめんなさいね。ちょっと待って…」
凛は笑いすぎて出てきた涙を拭う。
「で、それを聞いてどうするの？」
「え、えっと、それは…ま、負けない、って言っておきたい…です」
すると、ついに凛は爆笑しはじめた。
「し、失礼じゃないですか！」
「だって好きなのは当たり前よ！従兄妹なんだから！」
……
「えっ？」
凛が笑いを噛み殺している。
「今何て言いました？」

「好きなのは当たり前」
「その次」
「従兄妹だから、よ！」

「えええええええっっっ！！？」

「ふぁ…？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6130x/

ライバルのひ・み・つ？

2011年11月17日19時12分発行